体育の授業における教師の信念と授業観の具現及び形成のプロセスについての一考察

森山　悠斗　（　長崎大学　）

１．はじめに

今日求められている保健体育教師像には，授業研究や授業後の省察ができる教師であるとされる．それらの教師行動の基盤となるのが教師の信念や教師の考えである．これらは一般的に授業観を形成すると考えられ，教師が授業を行う際の，単元での目標，指導内容等は教師の信念によって構成される．しかし，現在の体育科教育学における教師教育研究では，教師の思考や教師の熟練及び発達に着目されながらも，保健体育教師（以下，体育教師）の授業実践中の思考に関する研究は，課題の一つとなっている．

２．目的及び方法

本研究は，体育の授業における教師の信念や授業観，思考過程を踏まえ,それらの具現化と形成のプロセスについて明らかにすることを目的とする．その際，一人称研究における実践事例を分析し，思考形成の一端を捉えることとする．

まず，教師の信念や授業観の形成のプロセス，体育教師の思考過程の先行研究について整理・検討する．次に一人称研究の事例を検討し，教師の思考過程としてまとめる．

３．体育科教育から見る教師の信念や授業観

教師の思考過程等，教師の暗黙知である信念と，信念から形成される，教師がどのような授業にしたいか等，授業に関する教師の目標や願いである授業観を基盤に，授業中での様々な事象に対する問題解決のための即興的思考が教師によって生み出されていた．また，体育の授業においても，教師は自身の信念や授業観をもとに，即興的に思考，意思決定し，教師行動を行っている．

４．一人称研究の成果と体育教師の授業観形成

ものの考え方の作用等，その人らしさが現れる「主観の世界」である「ひとの知」や「認知」を明らかにする際，従来の研究で重要視されてきた客観性だけでなく，主観的なデータを併用する必要があるとされる．教師の信念や授業観もその一つと考えられる．人が学ぶ際に表象する，その人が持つ主観の，違和感，疑問等の「ひとの知」や「認知」の紆余曲折を，一人称視点や主観的データを用いて解明する必要があるとした．また身体運動を伴う教授の体育の授業においても，諏訪（2022）による，陸上競技者が日常生活の動きの中で得る感覚を，「走る」ためのヒントを探究した一人称研究を参考に，学び手である運動者の主観である感覚を，身近な動きの中の感覚から指導するために，指導者は「日常で遭遇するものごとへのアンテナ」を巡らせることが重要と考える．体育教師自身の身体知における一人称研究は，「身体知の学びにおける紆余曲折を経た研究」であり，その教師特有の「体育の授業における教師の信念や授業観」の形成につながると考えられる．

５．結論

本研究では，授業行為を規定している思考の基盤であり，「ひとの知」でもある，体育教師の信念や授業観について整理・検討を行った．

紆余曲折を経て自身の知見や経験を重ねて現れる，「教師の信念や授業観」は，その教師特有の「教師行動」となって現れると同時に，体育教師の信念や授業観の具現の一端であると考えられる．また学びの紆余曲折の過程が，体育教師の信念や授業観の形成のプロセスと考えられる．

６．主な参考文献

諏訪正樹（2022）1 人称研究の実践と理論．近代科学社：東京．